

女子教育に  
身を捧げた

福西志計子

第2回

文 児玉 享さん

裁縫学校の設立

明治新政府は富国強兵策を図り、次々と統一政策を実施していった。身分制が廃されて、四民平等・職業選択の自由となったため、日本中が身を処す道を求めて競争する厳しい社会となっていた。高梁でも士族の多くは職を求めて東京や大阪に出、代わりに近隣の土地からの移住者が新しい職業に従事するなど、めまぐるしく変化していった。

福西志計子と木村静は明治9(1876)年から高梁小学校付属裁縫所に勤めていた。この頃から文明開化の時代を迎え、生活面でも西欧化が進み。明治5(1872)年12月3日を明治6年1月1日として欧米と同じ太陽暦を導入したが、農村では旧暦が併用された。西欧化は中央から地方へと進んだが、高梁は比較的速く取り入れられ、明治13(1880)年の新島襄の妻への手紙でみると「山の中とは申せ、至って繁華なる地なり、家数は千

余もこれ有り、中々開化風にて、夜も所々ランプもつき、暗夜といえども差し支えはなし、牛乳もあれば牛肉もあり、書店もあり、格別の不自由のなき所」と紹介されている。

西欧文明と共に自由民権運動やキリスト教も入ってきた。明治12(1879)年初めて県議会議員の選挙が行われ、高梁より柴原宗助が選出された。「山陽新報」に「米國遣伝教師ベレー氏及び中川横太郎、金森通輪の両氏は十月四日より三日間高梁裁縫校にて耶穌教の説教を行いたまひ、六日午後六時より開口社の演説あり、終りに岡山の谷川達海氏が国会開設論を演説せられたり」の記事が出ているが、これは柴原が自由民権運動を唱える中川横太郎とキリスト教教師金森通輪を連れて帰り、風俗改良講演会を開いたものである。金森通輪はキリスト教を説き、その後、毎月キリスト教の伝道に訪れ、福西、木村の2人は初めてキリスト教に接した。

新島襄は明治13年2月17日から19日



の3日間高梁に滞在、高梁小学校の裁縫所で1日目300人、2日目400人の聴衆を集め、別に婦人会で200人位の人に話をしていく。当時の高梁の人口は5000人位だから、町中こぞつての一大イベントになったと思われる。新島は人々に、我が国にとつては富国強兵よりも欧米のような文明国にすることこそ急務であり、文明の基を立てるためには信仰と教育であると説いている。まず神を知り、敬い、恐れ、そして信じ、愛すること、これは人間にとつてもっとも大切なことであり、神の規律を守ることにより自由人となり、文明の民となることのできる、と説く。教育の重要性と教育によって人心改良に取り組むことこそが国を盛んにすることであり、特に婦人

会では女性の教育の重要性を説き、母親として自分の子を立派に育てるため、自由の心を持ち、見識と愛情をもった女性を育てることの大切さを説いた。

新島の教えは福西の教育理念に合致していた。彼女は強く共感し、キリスト教に学び、風俗改良婦人会を組織して指導者として活動した。このような活動が町議会の問題となり、福西、木村両教師の活動への圧迫が強まった。ついに2人は明治14年7月に学校を辞職し、後援者の支持も得て、この年の12月10日に向町の黒野宅を借りて、私立裁縫所を設立した。月謝は10銭、20銭(100銭が1円)までとした。最初生徒は30人に達せず、生活、学校活動は厳しかったが、2人は信念をもって突き進んだ。

この学校の後継者は主にキリスト教を信奉する人々で、柴原宗助(県会議員)、柳井重宣(実業家)、赤木蘇平(医師)、須藤英江(医師)、小林尚一郎(薬屋のち町長)、石川豊次郎(資産家)、清水質(教師、比庵の父)らで年間100円、3年間援助している。

(次号へつづく)